自ら環境に関わり、主体的に遊ぶ幼児の育成

～自然環境との関わりを通して～

特色ある学校づくり推進園　　墨田区立立花幼稚園

１　研究主題について

（１）主題設定の理由

幼稚園教育要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、私たちは、幼児が主体的に遊ぶ力を身に付けていくことが大切であると考える。そして、幼児が様々なものやことに心を動かし、興味や関心をもって関わり、自分たちで遊びを進める中で考えたり試したりして遊びを深めていってほしい、と願っている。

本園の幼児は、様々なことに興味をもって関わろうとする幼児が多いが、一方で虫や植物などへの興味や関わり方には個人差が大きく、接し方が分からない、戸惑うなどの姿も見られる。また、本園には季節を感じられる自然環境が豊かにあるものの、教師自身が環境を生かした保育の実践に課題を感じている。自然環境は、幼児の感性や経験を豊かにし、探究心や表現力を育むことにつながると考える。そこで、本園の豊かな環境を生かし、幼児が自ら自然環境に関わり、主体的に遊ぶ姿につながる環境構成や援助の工夫について探りたいと考え、本主題を設定した。

（２）研究のねらい

自ら自然環境に関わり、感性や経験を豊かにしながら主体的に遊ぶ幼児を育むために、園の自然環境についての理解を深め、環境構成と援助の工夫について探る。

２　研究の概要

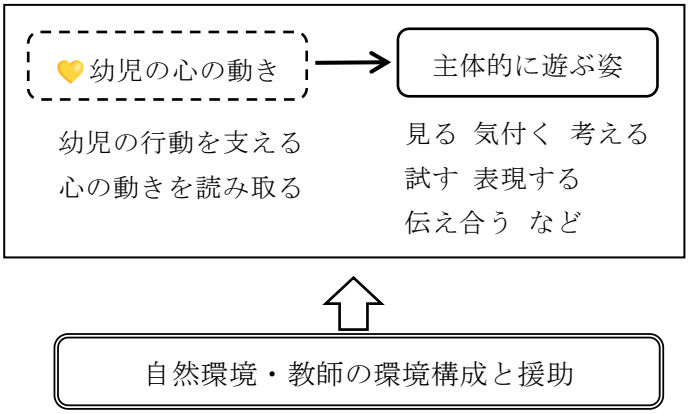
（１）目指す幼児像「自ら環境に関わり、主体的に遊ぶ幼児」

・様々なものやことに心を動かし、興味や関心をもって関わろうとする幼児
・身の回りの様々な自然環境を取り入れて遊ぶ中で、自ら遊びを進める幼児

（２）方法・内容

①事例検討

事例検討を行う際には、まず「幼児の主体的に遊ぶ姿」と「教師の援助」に着目した。検討を重ねる中で、主体的な遊びには、その前に必ず、「幼児の心の動き」があるということが分かった。そこで、幼児の主体的に遊ぶ姿につながる「幼児の心の動き」と「自然環境・教師の環境構成と援助」について分析・考察を行った。



・教師の意図
・自然環境の魅力を生かした環境構成・援助
・反省・評価

事例１ 4歳児 10月「ドングリちゃん」～自分なりにじっくり関わり、表現した事例～

【ねらい】 ○身近な秋の自然に親しむ。

【内　容】 ・ドングリに十分触れ、じっくりと関わる。
・ドングリに愛着を感じ、自分なりに表現する。

【エピソード】（下線は主体的な姿）　　【分析】💛幼児の心の動き

遠足の翌日、教師は、皆で拾ったたくさんのドングリを大きなかごに入れ、保育室に置いておく。

数人の幼児が興味をもち、触り始める。一つ一つを手に取り、じっと見つめる幼児や、かごに手を入れてかき混ぜ、たくさんある感触を楽しむ幼児がいる。

「音が鳴る！」

丸いドングリ（クヌギ）を手に取り、「まるまるちゃんだ」、小さいドングリ（コナラ）を「赤ちゃん」などと名付け始める。ドングリを振り、「音が鳴る」と気付いた幼児は、音が鳴るドングリだけを集め始める。

教師は、「本当だ、音が鳴るのと鳴らないのがあるね」、「これもまるまるちゃんだね」、「帽子かわいいね」などと共感し、いくつか容器を出す。同じ場にいた幼児は、丸いもの、音が鳴るもの、小さいもの、帽子などを一緒に見付けて集め始め、それぞれを容器に分け始める。大きなドングリを見付けて、「これはチャンピオン！」などと言いながら繰り返す。

💛自分が拾ったドングリかわいいな
💛たくさんあってうれしい
💛気持ちいい（感触）

💛いろいろな形がある

💛名前を付けよう

💛音が鳴るのは不思議、面白い

💛仲間集めしたい

💛仲間集めが面白い

【考察】環境構成と援助（太字は指導のポイント）

・様々な種類の**ドングリが豊富にある公園への遠足を計画**した。たくさんのドングリを拾えたこと、種類によって様々な形や大きさがあることで、一人一人の幼児が様々に興味をもって関わる姿につながった。**教師が地域の環境をよく知り生かしていく**こと、**幼児の体験を地域や家庭での遊びへも広がるようにする**ことも重要である。
・楽しかった遠足を思い出しながら、ドングリにじっくりと関わり遊んでほしいと思い、**環境として設定した**。自分たちで拾ったという体験が、親しみをもって関わることにつながった。
・**じっくりと関わる時間をとった**ことで、名付ける、形や音の違いや面白さに気付く、分類するなどの姿が出てきた。
・幼児が**どのように関わり、感じるのかを読み取り、その姿に共感**していくことで、感じたり気付いたりしたことを言葉にする姿が増え、その楽しさが周りの幼児にも伝わっていった。
・幼児がドングリの形や特徴、違いに気付き、仲間集めをする姿を捉え、教師は**さりげなく容器を提示**した。教師が必要以上に“○○遊び”に結び付けるのではなく、**幼児が楽しんでいること、実現したいと思っていることを捉え、繰り返し楽しめるような環境を工夫する**ことが大切である。

事例２ ５歳児４月～５月「たけのこ探検隊」～本園ならではの直接体験をした事例～

【ねらい】 ○身近な自然に関心をもって関わり、変化を面白いと感じる。

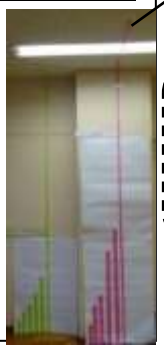
【内　容】 ・親しみや期待感をもって繰り返し関わる。
・よく見て気付いたり、考えたり、推測したりする。
・長さの感覚や伸びるという感覚を知る。
・気付いたことを伝え合う。

【エピソード】（下線は主体的な姿）

園庭の竹藪に生えているたけのこを数人の幼児が見付ける。教師が学級全体に共有し、皆で見に行く機会を設ける。多くの幼児が関心をもち、気に入ったたけのこに名前を付け、学級皆で毎日様子を見に行くようになった。

多くの幼児が登園後すぐに進んで見に行く。定規を使って自分たちで長さを測り、連日伸びていくことを面白がったり、「今日はノコくん大きくなっているかな」、「たぶん 50 センチくらいになっていると思うよ」と期待や親しみをもって関わったりする姿も増えていく。教師は、幼児の気付きを認め、変化に驚いたり喜んだりする気持ちに共感する。１週間程経つと幼児の背と同じくらいになる。「○○くんとどっちが大きいかな」、「僕よりも大きくなってる」などと、背比べをして変化を楽しむ姿も見られる。

連休明け、登園後すぐに大きく生長しているたけのこを見付けた幼児が「タケコちゃんが！！」「ノコくんが！！」と大興奮で教師や友達に伝える。実際に長さを測り、「すごい」と大喜びする。教師が保育室に実際の長さを示すと、前回からの変化が分かりやすくなり、驚きの声があがった。



【分析】 幼児の心の動き

- 僕・私のお気に入りのたけのこ（親しみ）
- 大きくなったかな
- 大きくなってる（驚き）
- 大きくなってうれしい
- 僕と同じくらいかな
- すごく大きくなってる
- みんなに伝えたい
- どのくらいまで大きくなるのかな
- どんどん大きくなって面白い・うれしい

【考察】環境構成と援助（太字は指導のポイント）

・幼児の気付きを学級みんなで**共有する機会を設ける**ことで、多くの幼児が関心をもち、関わる姿につながった。

・幼児の面白がっていることや気付き、驚きを**認め、共感したこと**で、繰り返し関わる姿や、幼児同士で伝え合い、友達の気付きを取り入れて関わる姿につながった。

・**自由に行き来しやすい環境設定**をしたり、幼児自身が**扱いやすいよう、数字を分かりやすく示した定規を提示**したりすることで、自分たちで繰り返し進んで関わる姿につながり、変化する面白さを十分に味わうことができた。

・繰り返し関わる中で、**長さの変化を視覚的に分かりやすく示した**ことで、変化を実感したり面白がったりする姿につながった。

・竹藪という環境は本園の特色であり、毎年春になるとたけのこが芽を出す。日に日に変化し、変化が分かりやすいため、幼児自身が気付いたり考えたりする姿が多く表れ、関心が継続しやすく、伝え合おうとする姿にもつながる。年長児を中心に、たけのことの関わりは本園の文化となっており、**時期を逃さず計画的に体験させたい**遊びである。

事例３ ５歳児９月「ピッちゃんの診察」～生き物に心を寄せた事例～

【ねらい】○身近な生き物に親しみをもって接し、労わったり大切にしたりする気持ちをもつ。

【内　容】・身近な生き物の気持ちを考えたり、感じとろうとしたりする。

・必要な世話の仕方を考える。

【エピソード】（下線は主体的な姿）

学級で飼育しているインコのピッちゃんに出血が見られた。教師が学級全体にインコの症状や元気のないことを伝えると、心配して何度も様子を見に行く幼児がいた。再度出血が見られたため、教師は、獣医に往診してもらうことにし、そのことを学級全体に伝えた。

事前に、学級でインコについて話し合う。「一羽になってしまったので寂しかったのではないか」、「獣医さんにどうしたら元気になるかを教えてもらいたい」などの意見が出る。

獣医に保育室で診察してもらい、その様子を全員が見守る。事前に話し合ったことを質問した後、獣医の回答を真剣に聞く姿が見られた。

翌日、Ａ児が自ら紙に「ピッちゃんの気持ちを考える」と書き、「鳥カゴに貼りたい」と伝えにくる。インコを心配し、他の幼児たちにも大事に世話をしてもらいたいと家で考えてきたとのことであった。教師は、Ａ児がインコに心を寄せて考えたこと認めて共感し、学級全体で考える機会をつくった。他の幼児からは、「痛いと思う」、「悲しいと思う」、「大事にしたい」という意見が出る。

これまでもインコに親しみをもち、責任をもって当番活動を行う姿が見られていた。しかし、今回のことをきっかけに、ほとんどの幼児が一日に何度も様子を見に行って友達と一緒に心配したり、心を込めて丁寧に世話をしたりする姿が見られるようになった。

【分析】幼児の心の動き

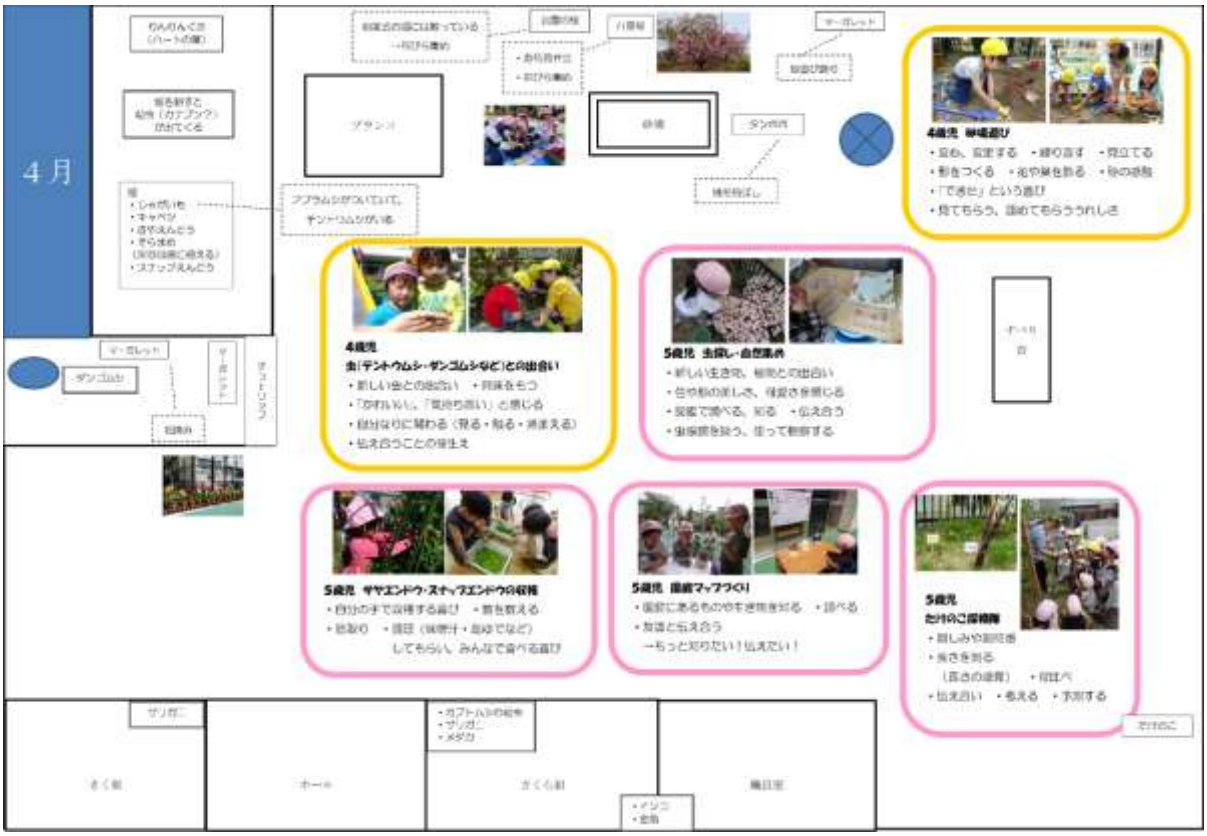
- どうしたのかな
- 心配だね
- 大丈夫かな
- 獣医さんに教えてもらいたい
- ピッちゃんに元気になってほしい
- そのためにはどうしたらいいのかな
- ピッちゃんの気持ちを考えよう
- 大切にしよう

【考察】環境構成と援助（太字は指導のポイント）

- 生活の中で生き物を身近な環境で飼育し、親しみもって接する機会をつくることで、労わったり大切にしたりする気持ちが芽生えることにつながった。
- 飼育しているインコに心を寄せて自分なりに感じたり考えたりしてほしいと考え、獣医に**学級の前で診察してもらう機会をつくった**。
- より深く生き物の存在を大切にしたり理解しようとしたりする幼児の思いを**認めたり共感したりし、そのことを学級全体で共有できるようにする**。
- 友達の意見に耳を傾けたり、一人一人が自分なりに考えたり発信したりできるように、幼児自身が感じたことを**学級全体で話し合い、考える機会をもつ**。
- この事例は、遊びの場面ではないが、飼育している生き物に幼児が主体的に関わった事例である。生き物の生命に触れる経験は偶発的であるため、幼児が生命の大切さに気付けるように、**機会を逃さずに真剣に関わる体験になるようにする**ことが大切である。
- 生き物を飼育する際には、**アレルギーや感染症などに十分配慮する**ことや、獣医などの**専門家の知識や地域の教育力を生かす**ことが大切である。

②園庭マップの作成

事例検討や研究保育を通して学んだことや、現在の園内の自然環境について共通理解したことを、月ごとに「園庭マップ」としてまとめた。マップには、その時期ならではの植物や生き物などの自然環境、自然環境を生かした遊び、その遊びを通して経験できることなどを記載した。



園庭マップを作成したことで、園庭の自然環境についての空間的な理解を深め、それぞれの自然環境がもつ魅力についても知ることができた。また、その時期に応じて経験することのできる遊びについて整理することができ、計画的に保育に組み入れることに役立った。

一方で、幼児の遊びや活動の時間的な流れ、幼児の経験の積み重ねや成長などをマップから読み取ることは難しいことが分かった。マップの作成と併せて事例検討を行ったり、月ごとのマップを見比べたりしながら、時系列の変化や体験のつながりを考えて保育を計画していく必要がある。

③研究保育・講師指導

講師　聖心女子大学　非常勤講師　赤石　元子　先生

第一回　9 月 14 日（月）　第二回　11 月 16 日（月）　第三回　12 月 14 日（月）

３　まとめと今後の課題

本研究を通して、園の自然環境への理解を深め、幼児の経験を豊かにするための環境構成や指導法の工夫を探ることができた。教師自身が豊かな感性をもち、工夫して環境構成や援助を行うことで、幼児が様々な場面で心を動かし、主体的に関わろうとする姿や、身の回りの自然環境を取り入れ、遊びを進めようとする姿につながった。研究を通して、環境構成や援助について分かったことは以下の通りである。

幼児の心の動きに寄り添う・読み取る

・自然との関わりにおいて、教師は、すぐに遊びに取り入れようとしてしまいがちである。すぐに答えや形にして対象化してしまうことで､幼児の感性が狭まってしまうのではないか。幼児が自分なりのイメージの中に自然物を取り入れ、楽しんでいる姿、純粋な興味・関心や面白がっていること、心を動かしていることに寄り添っていきたい。

・幼児は自然物と出合い、自分なりに関心をもって「見る」､「触る」､「試す」などの関わりをする中で､「面白い」､「かわいい」､「不思議」などと心を動かしている。「じっと見る」などの小さな行動にも、幼児なりの心の動きが表れる。幼児が自らどのように関わっているのか、どのように取り入れるのか、どのように表現したいのかを読み取ることが大切である。

時期に応じた直接体験を大切にする

幼児は自然と出合い、自分が直接体験をしたからこそ、自然物に関心や愛着をもつ。直接体験において様々な感覚を働かせ、感じることで心が動く。心が動くことで、もっとやってみたいという気持ちが芽生え、自ら考えたり、試したり、表現したりすることにつながる。

園内外の自然環境を理解する・計画的に生かす

・その時期にしか出合えない魅力ある自然環境を十分に生かしながら、意図的・計画的に保育を進めることが大切である。その中で、幼児の経験や学びを意識し、幼児の心が動く環境構成や援助の工夫について見通しをもった計画をたてていくことが重要である。

・園内の環境に限らず、地域の環境や人材を生かすことも、幼児の体験や学びの広がりにつながる。

教師も感性を豊かに働かせる

季節・気温・植物・生き物・自然現象などに対し、教師も感性を豊かに働かせて接することが大切である。教師が心を寄せてじっくり見たり関わったりする姿は、自然と幼児にも伝わり､「面白そう」､「やってみたい」という主体的な姿につながっていく。

友達の姿に気付けるようにする

一人一人の幼児の楽しんでいることや気付きに共感し、認めたり、学級で共有する機会を設けたりすることで、友達の姿に刺激を受け、自分の遊びに取り入れるようになる。また、幼児同士が共感し合うことで、互いに伝え合ったり一緒に進めたりして、主体的に遊ぶ姿へとつながっていく。友達の姿に気付けるよう援助していくことが大切である。

チャンスを逃さず捉える

自然界では予測のできない突発的なことや偶発的なことも起こるものである。時期やタイミングを逃さず、幼児の学びのチャンスとして捉え、生かしていくことが大切である。

今後も、事例を積み重ねた園庭マップの活用を通して、幼児が体験を表現する過程を大切にしながら学びを読み取り、多様性や連続性を捉えた保育の展開や援助の在り方についてさらに探究していく。また、小学校教育への学びの接続も見据えた指導計画の見直しを図り、主体的に遊ぶ幼児を育成していきたい。